1 インタビュー

データ利活用に必要な機能をワンストップで提供する Smart Data Platform でデジタルトランスフォーメーションを推進

NTT コミュニケーションズ（以下、NTT Com）は、“DX Enabler™”としてお客さまのデジタルトランスフォーメーション（以下、DX）を支えることを事業戦略として掲げている。その上で重要な役割を果たすプラットフォーム「Smart Data Platform（以下、SDPF）」の提供を 2019 年 9 月末に開始した。SDPF の開発を担うネットワークサービス部（以下、NS 部）、クラウドサービス部（以下、CL 部）のトップを兼務する佐々倉秀一取締役にお話を伺った。

NTT コミュニケーションズ株式会社 取締役
ネットワークサービス部長
兼 クラウドサービス部長
佐々倉 秀一氏

ネットワークとクラウドを一体で支えるのが NTT Com の役割

――まず、今年7月にNS部に加えCL部のトップに就任された狙いをお聞かせください。

佐々倉　最近は拠点同士を結ぶ単発の通信ではなく、さまざまなクラウドやデバイス間の通信が複雑に組み合わさり、はじめてお客さまのやりたいことが実現できるようになりました。この動きに対応するためにも、ネットワーク（以下、NW）とクラウドを一体で支えることが NTT Com ならではのお客さまへの提供価値になるだろうという考えが背景にあります。

「やりたいことにすぐに取り組める」ようデータ利活用の手間を軽減

―― SDPF を開発された狙いや経緯について聞かせください。

佐々倉　NTT Com は「お客さまや社会の DX を推進し Smart World を実現する」ことを事業戦略として掲げています。そのためにはさまざまなデータの利活用が不可欠です。しかし世の中のデータは多種多様であり、さまざまな場所に分散しています。そのため図 1 に示すように、データの種類に応じて使用する NW、クラウドやオンプレミスシステムなどの保管基盤、地理的な保管場所、データを保護するためのセキュリティ対策を適切に組み合わせる必要があります。加えて SaaS などの様々なアプリも考慮せねばなりません。

しかし、これらはお客さまにとっては面倒なことであり、注力されたいコアな事業分野でもないでしょう。そこで我々がこれらを肩代わりすることで、データの特性や重要性に合わせてインフラサービスやデータマネジメントサービスを選択でき、お客さまがやりたいことにすぐ取り組めるようにすることが SDPF 開発の目的です。

4 つの「ONE」をコンセプトにデータ利活用に必要なすべてを実現

――具体的にはSDPFとはどのようなものでしょうか？

佐々倉　ALL in ONE、ONE STOP、ONE CLICK to SERVICE、ONE POLICY という 4 つの「ONE」をコンセプトにしたプラットフォームです。お客さまのデータ利活用にあたり、そ

図 1　データの特徴に応じた接続、保管、セキュリティが必要

の収集、蓄積、分析に必要な各種機能をワンストップで（ALL in ONE, ONE STOP）、しかも簡単な操作によりすぐ利用できる形で提供します（ONE CLICK to SERVICE）。また大事なデータを安心して扱えるようにシステム全体が一貫したポリシーで管理・運用されます（ONE POLICY）。

――SDPFで実現できることについて教えてください。

佐々倉　DXを果たすためには、クラウドに存在するさまざまな機能を組み合わせて使う必要があります。そしてその結果、複数のクラウドが混在するマルチクラウド環境になっていくと思います。そうなると構成は複雑化しますし、データも分散するので、DXを進めるにはそれらへの配慮が必要です。そのためSDPFはマルチクラウドで求められる以下3つの勘所を押さえています。

1つはクラウドサービスや拠点、デバイスなど各種ICTリソース間におけるNW疎通性の確保です。そのために9月に提供を開始した「Flexible InterConnect」はまさにSDPFの中核と言えます。また2月にNTTグループの一員に加わった仏Transatel社を通じeSIMを活用したグローバルなモバイルコネクティビティサービスを提供します。さらにエッジコンピューティング向けのサービスを提供する準備も進めています。

2つ目はAPIやデータ形式の違いを気にすることなく、サービスを跨るデータ利活用を可能にするデータインテグレーションです。これは、米Informatica社との協業により実現しています。加えて企業間や拠点のデータマネジメント基盤「iQuattro®」

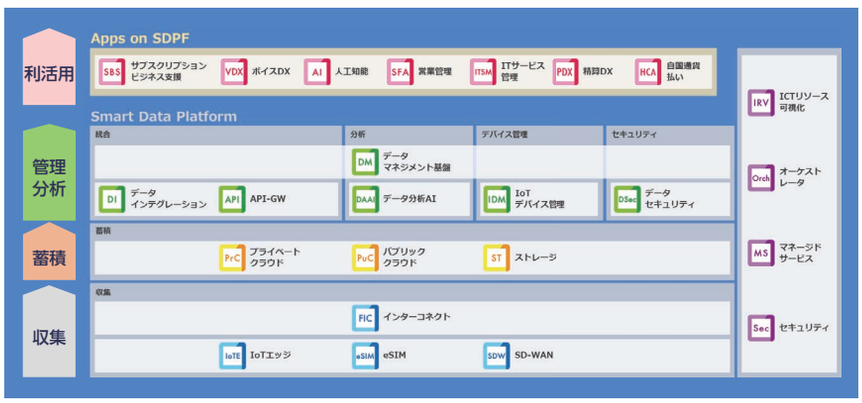

図2　Smart Data Platformを構成する主な機能

をNTTデータとの協業で提供しています。また、セキュリティもデータマネジメントの中まで入り込んで確保する必要がありますから、NTTテクノクロスの「匿名加工情報ソフトウェア」を活用したクラウド型匿名加工サービスも9月から提供しています。

3つ目は大容量データの保管です。Amazon S3をはじめとするクラウド型のオブジェクトストレージサービスは大容量データの保管に適していますが、データ転送料を負担に感じるお客さまも少なくありません。そこで米国Wasabi社との協業により、データ転送料が無料の「Enterprise Cloud Wasabi オブジェクトストレージ」を提供しています。保管単価が安いことも特長の1つです。ここでお話したFlexible InterConnectをはじめとしたSDPFの主な構成要素については、本特集の中でご紹介します。

DXを支援するために必要な機能を随時追加していく

――SDPFをどのように提案していくお考えですか？

佐々倉　エンタープライズ系のお客さま向けには2つのパターンがあると考えています。1つは既存の社内ITに関するDXに取り組むお客さま。もう1つはクラウドネイティブで新たなシステムやサービスを構築するお客さまです。また、SaaS事業者さまが既存のソフトウェアやサービスをクラウドに移行するケースや新たなサービスを立ち上げ市場に参入するケースでもNTT ComのSDPFやEnterprise Cloudをお選び頂けると考えています。

――今後SDPFを展開していかれる上での抱負など、お聞かせください。

佐々倉　SDPFの提供に注力していきますが、目的はあくまで「Smart World実現のためのDX支援」であり、そのために必要なデータ利活用を支えるのがSDPFという点が重要です。私どもはSDPFで「エンド・ツー・エンドでのデータマネジメント」を実現したいと考えており、今後もその実現に必要な機能を随時追加していく予定です。自社開発に拘らずパートナーの技術やサービスを活用しながら、お客さまのDXを支援するために必要なものを揃え、ワンストップで提供していきたいと考えています。

――本日は有り難う御座いました。